

新版歌祭文

竹本摂津大掾

〈出典：『義太夫の心得』中島辰文館、明治44年10月〉

義太夫は貞享二年の二月に今の浪花座の在ります所で、元祖義太夫が筑後椽の芝居とい
うのを開業しましたのが嚆矢^{はじまり}で、年代記を繰って見ましても解りますが、其時の出物は世継
曾我という例の近松さんの傑作でございました。其れから後三十年も経ちましてから、正徳
四年に滝口横笛娥哥留多^{はなぐちよこふエカ}というのを興行しましたが、其八月から筑後椽は病気に罹りまし
て、六十四歳を一期として、終^{つい}に釈道喜という法名を付ける様になりました。丁度其時分に
豊竹越前少椽という人がございまして、これは筑後椽の門人でございましたが、後に分かれ
て今の弁天座と朝日座の間口の処に芝居の櫓を上げて、西と東と両方に分れて興行するこ
とになりました。

そこで其当時の作者はと申しますと、例の近松門左衛門で、ツマリ筑後椽と門左衛門とは、
互^{たがい}に相待^{あいま}って其腕を揮ったという事になるのでございます。爾^そういう工合^{くあい}で浄瑠璃の方も
段々と発達してまいりましたが、別けて非常な好評をうけて世に現われて参ったものが、彼^か
の世話物でござります。新版歌祭文なども矢張りこの時代の影響をうけて、世間に現れたも
のに相違^{ちがひ}ございませんが、私はこの浄瑠璃を平生^{ふだんよ}能く読んで見ますに、洵^{まこと}に人情が能く
映^{うつ}って居りまして、お染^{おせん}といい久松^{ひさまつ}といい又^{また}久作^{ひささく}といい何^いずれも非常な上出来であると、
斯^か様に感服^{かんぷく}して読んで居るのでございます。唯^{ただ}だ茲^{こゝ}に一ツ不思議^{ふしぎ}に思^{おも}います事は、歌舞伎
で見ましても人形^{にんぎょう}で見ましても、どれも皆お光^{ひかり}というものが何^いうものか、独り妙な工合
になって居りまして、余程^{よほど}其調子が変^{へん}では無いかと存^{ぞん}じます。尤も深い事は心得^{こころえ}ませんが、
私の考^{かんが}える所に依^よりますと、何^いうも本文の意味とは少し違^{ちが}やアしませんかと思^{おも}いますの
で、アノお光^{ひかり}を書いた作者の腹^{はら}は、決して彼^かの様^{よう}な艶^{あや}のある色ッぽい娘^{むすめ}ではございませ
ん。彼^かアいう風^{ふう}では、大阪^{おさか}の花街^{はなまち}に育^はったものとより外^{ほか}は見^みえませんで、同じ大阪^{おさか}の在^ありに住^す
んで居^いりまして、お染^{おせん}に対するお光^{ひかり}というのでございましてから、何^い所^{ところ}となく質^{しつ}朴^{ぱく}な在^ありの生
娘^{むすめ}という心持^{こころもち}が、な^いければなるまいかと存^{ぞん}じます。爾^そういう所^{ところ}から私は成^なるべく気^きの利^き
き過^すぎない様^{よう}にと、注意^{ちゅうい}して居^いります積^{つもり}でございまして、さて実際^{じつじ}にはこれ^{これ}が何^いう風^{ふう}
に聞^きこえましようかと、常^{じょう}から余程^{よほど}気に致^{いた}して居^いるのでございまして。

▲秘伝の外の秘伝

新版歌祭文の浄瑠璃は、安永九年に近松半二^{かか}が書^かれましたので、其後間も無^なく亡^なりました
から、モウズツト晩年^{ばんねん}の作^{さく}でございまして。彼^かの人の書^かいたものは、近松^{かか}さんの様^{よう}に難^{がた}
しくは御座^{ござ}いませんが、極^{ごく}平^{へい}ツたく意味^{いみ}の解^とり易^{やす}い人情^{にんじやう}を能^{よく}穿^うったものが沢^{たく}山^{さん}ござい
まして。丁度^{ちやうど}其頃^{そのころ}豊竹伊太夫^{とよたけいとうぶ}という太夫^{たうぶ}がありまして、これは寛延^{かんえん}年間に受領^{じやうりやう}
して筑前椽^{ちくぜん}となりましたが、其^{その}の門人^{もんじん}に岡太夫^{おかたうぶ}という人が御座^{ござ}いまして、其^{その}又^{また}門人^{もんじん}
に初代^{はつだい}豊竹組太夫^{とよたけぐみたうぶ}——俗^よに靱^きの組太夫^{ぐみたうぶ}と云^いった人がございまして。これ^{これ}が洵^{まこと}に善^よう野崎^{のさき}村^{むら}を語^{かた}
りましたそうで、前後^{ぜんご}にこの

位結構な野崎村は無いという事を聞いて居ります。

此浄瑠璃の本文が際立って立派な事は、私共が一々申上げる迄もございませんが、アノ『覚束なます拵へも、祝ふ太根の友白髪……手元も軽うちよきちよきちよき』という、彼所あそこのちよきちよきちよきは実際語って見ますと中々面白い所で、三味線に合わせてちよきちよきちよきと遣りますが、其具合というものは何うも残念ながら口に出してお話するという事は出来ません。語り三味線の手にお光が指端ゆびさきを一寸斬るという心持を示してあるのでございますが、是れは余程巧妙に着いて居りまして、『手元も軽う、ちよきちよきちよき、切つても切れぬ恋衣や』と、お染を引出してまいるのでございます。

それから土産の所になりまして、『コレコレ女子衆、さもしけれども是なりと、夢にもそれと白玉か、露を帛紗に包みのまま』という、アノ件くだりは能く気を付けてお聴きになると解りますが、夢にもそれと白玉かと一気に言ってしましまいますし、一向味がございません。是れは御存知の通り一寸疑いの意味を含んで居りますので、此様なものでも遣ったら何うであろうかと、腹の中で考えながらお光の顔を一寸見るのでございますから、『さもしけれども是なりと、ツン、夢にもそれと白ア——玉か』と、其間を少し間伸びにして語らねばなりません。其の調子がいわゆる「程ほど」と申しまするので、これは到底義太夫の譜を覚えたからと云って、それで呼吸が呑込められる訳のものではございません。以心伝心——秘伝の外の秘伝というものが此所の事でございます。

▲脚に灸をすえる

久作が灸を据える所は、人形の方では余程面白い事をしますので、久松はお染に気を取られて肩を揉む方の手がゆるむと、お光は又も又もと線香を持った儘伸上がり、久作の天窓あたまに灸を据えるなど杯おという、浄瑠璃の本文にも無い可笑おしな事をしますが、此熱いという心持を語りますにも、『オツと、こたえるぞこたえるぞ……アツツ、えらいぞえらいぞ』というばかりでは、一向熱いという情が映りません。私の若い時分にも此熱いで非常に苦しみましたは何うしても熱いという真の情が乗りません。そこで師匠の野沢吉兵衛が喧しく申しまして、自分に灸を据えて見ろと迄言われましたが、熱いという心持よりも其れを耐こらえる所の心持が一層難しい様に考えました。

それから久松とお染の諍いになりまして『振袖の持病のと、いろいろの耳こすり』という所がござりますが、あれを其儘語って了わずに、『振袖の持病のと、モ、いろいろの』と、一字のモもの字を加えて語りますと、久松も腹を立てて居ります様子が尚一層深く強く聞こえますので、是れは『ホホホホ、マま、変わったことがお気に障った』という所も、『喧嘩の行司さすのかいやい二人とも、エエ嗜こめ』という所も同じで、之これれを口拍子と申しますが、実に一字のことで非常に活動します様に考えます。

▲竹本と豊竹

野崎村の段を語った昔の名人を豊竹組太夫となつて居りますが、彼かれは竹本組太夫の間

違いでござります。尤もこの竹本と豊竹との相違の点は極単純でございまして、竹本筑後椽の西の芝居と、豊竹若太夫の東の芝居と、両方に岐^{わか}れて居りまするので、西の芝居へ僣^{やと}われますものは、座元の名を取って竹本と名乗りまするし、又東の芝居へ出まするものは、若太夫の名を取って豊竹と名乗ることになりまするが、必ずしも一方の座に永く居付になつて居りませんから、或時は竹本とも云いまするし、又或時は豊竹とも名乗るのでござります。

そこで彼の組太夫が野崎村の段を語りまするに、一体此人は少し声が鼻に掛^かっていましたそうで、例の鼻声でこの野崎村を語るといふと、何しろ新作の事ではありまするし、近松半二さんが腕を揮ったものでござりますから、其評判の凄まじい勢いと云つたら実に非常なもので、安永天明の頃の素人が悉^{みな}皆組太夫の模倣^{まね}をしまして、大坂市中のものがスツカリ鼻声になって了つたという位の名人でござりました。